

謎の巨石文明と古代日本

①三内丸山遺跡、その後の十年を手掛かりにして思うこと

副会長 鈴木旭

いまから十年程前のことになる。

私は「別冊歴史読本／第21巻33号」(新人物往来社刊)に表題のような一文を寄せた。そして、改めて読み直す機会があり、目を通してため息をついた。この原稿は未だに新しく、書き直す必要がなく、書かれた内容を上回る動きが出ていないということである。私は愕然とした。ちようどよい機会なので、若干の補足を入れながら再録し、改めて問題定期の書としてみたい。三、四回に分けて掲載する。

古代山岳祭祀遺跡

平成七年(一九九六)夏、三内丸山遺跡(青森市)の全貌が明らかにされた時、マスコミの報道は「縄文の定説覆す」「定住し社会を形成」とか、「四五〇〇年前の巨大木柱出土」「吉野ヶ里しのぐ可能性」と盛んに書き立て、大騒ぎになった。あれから十年の歳月が過ぎ去った。その間、何か、変化とか、進歩というべき動きがあったのだろうか。

いまさら書くことでもないが、三内丸山遺跡は青森市の中心から南西

へ三キロメートル、緩やかな坂道を登った小高い丘の上にある。総面積五ヘクタール。多数の住居や墓、倉庫、「み」捨て場の跡地がまとまって出土すること自体、めずらしいことであり、弥生期の定住集落と比べても遜色のない遺跡であった。場合によっては上回る部分さえ見られたのである。

それで一躍注目されたのであるが、「腑に落ちない点が一つある」ということで再び話題になった。ある発掘関係者が「三内丸山はとてつもなく大きい。コンパクトにまとまった集落ではたたくさんの機能が集まっているが、祭祀にまつわる一角が今回発掘された場所以外にあるように思えてならない」と述べたのだ。

その意味は「三内丸山遺跡の縄文人を集団として統合し、統一する求心点になっていたはずの祭祀場が、今回発掘調査された場所とは違うところにあるのではないか」ということだった。このコメントを耳にした時、なるほど、見る人は見ているものだと私は思った。

いろいろなところで何度も言うてきたことだが、考古学にいう遺跡とは四種あり、①住居跡②墓地(古墳等)③生産史跡④祭祀遺跡のどれかを指している。最も重要なのが④祭祀遺跡であることは言うまでもない。①から④を並列して語られるべきものではない。別格的存在である。それが三内丸山遺跡では見つかったのではないのだから当然、前記のような言になる。異常事態である。

そうなると周囲を取り囲む縄文遺跡群(前期〜中期)を見直す必要に迫られる。大小取り混ぜて合計十四カ所に及ぶ遺跡群の位置関係を見れば、三内丸山遺跡に関わりを持っているのは明白である。同じ台地の上に隣り合って密集しており、それぞれ地形上、方角上、何らかの関係を保持している。そういう意味では注目しておきたいのは三内霊園遺跡ではないだろうか。

三内霊園のある高台は、三内丸山遺跡からみてちようど北西方向にあり、地形的に見れば、ゆるやかに競り上がって行く頂点を形作ってい

るだけでなく、かつては海であった青森市街を見下ろすには絶好の見晴台であり、下から見れば絶好のポイントになる。

そうなる、いささか根拠として挙げるには弱すぎるかもしれないが、いい場所を占めていると言えないだろうか。そこが三内丸山縄文人の中心施設となる祭祀場であったとしたら、周辺の遺跡群を一望の下に見渡すことができるだけでなく、周辺環境の地の利を掌握できた。

広大な遺跡も中心点となる祭祀場がなければまとまりを欠き、画竜点睛を欠くのは言うまでもない。その意味では、祭祀場となる遺跡を探し出した時こそ、無理のない解釈を可能にする縄文遺跡の全体像が与えられることになるだろう。そうでなければ、永久に三内丸山遺跡の実像を見ることはできない。

では、中心施設となる祭祀場とはどういう遺跡なのか。次回は、その遺跡像を黒又山をケーススタディにして論じてみたい。

(続く)



地図1 三内丸山遺跡の位置と周辺の遺跡

1 三内丸山遺跡(前・中期)、2 近野遺跡(中期)、3 三内沢部(1)遺跡(前・中期)、4 三内沢部(2)遺跡(中期)、5 三内遺跡(中期)、6 三内雲岡遺跡(前・中期)、7 熊沢遺跡(前期)、8 安田水天宮遺跡(前・中期)、9 安田(1)遺跡(前期)、10 安田(2)遺跡、11 浪館(1)遺跡(前期)、12 浪館(2)遺跡(中期)、13 江波遺跡(前期)、14 石江遺跡(前期)、15 新城平岡(1)遺跡(前・中期)